

## 〔Eメール往復書簡〕

# カノン、カウンターカノン

ハルオ・シラネ  
藤井貞和

9月11日 ニューヨーク市から (Eメール往復書簡①)

ハルオ・シラネ

藤井さん、今日は9月11日です。追悼の日です。去年のことがいろいろと思い起こされます。ちょうど一年前のこの日、コロンビア大学の大学院の「源氏物語」のゼミの用意をしていました。朝9時に大学院生のひとりから自宅に電話がかかって来て、「世界貿易センタービルで事故が起ったようですが、今日ゼミはありますか。」というのです。世界貿易センタービルは直接うちの窓から見えないので、慌ててテレビを付けると、両方のタワーが燃えていました。何が起っているのかよく分かりませんでした。「源氏物語は読めないかも知れないけれども、いずれにしても皆が集まって話し合ったほうがいい」と学生たちに伝えました。

10時ごろ、研究室に大学院生たちが集まった時点では世界貿易センターは、もう崩れていました。一人の大学院生

の奥さんが貿易センターの隣のビルに勤めていましたが、まったく連絡が取れない状況でした。あとで分かったことですが、コロンビア大学の卒業生だけで、107人が死亡しました。

悪夢の日々でした。最初の一週間は生存者(ビルに残っている人たち)の安否のことで頭が一杯でした。学生たちはみな何らかの形で被害者を助けたいという気持ちが強かったのですが、最終的には、生存者がほとんどいなくなったため(逃げた人は逃げたが残った人はほとんど例外なしに死亡した)、救助作業をしている人を助けるかたちになりました。人と会おうと、みな黙って抱き合った。ニューヨークに長年住んでいますが、今回はじめて、ひとつの村に住んでいる感じがしました。ただし、今までのような平和と安全の生活はもうないだろうと思いました。爆弾の恐れが

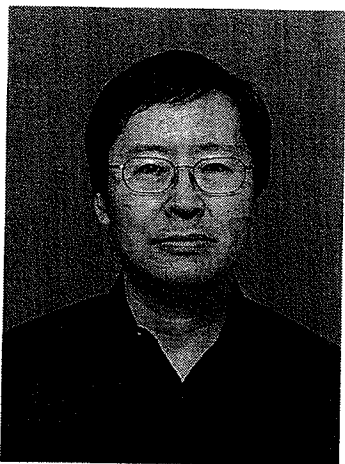
相次いでいました。マンションの前の車に爆弾が仕掛けられていたようだ、ということでも立ち入り禁止になり、一時的に家に帰れなくなったこともありました。

このような悲惨な事態に直面したときには文学がほど遠いものに見えるかも知れませんが、一つ印象的だったのは、人々が公園や広場に集まって、短い詩を書いて壁に貼ったりした光景です。(子供たちも同じように絵を描いたりして壁に貼っていました。)アメリカでは、普段あまり見かけない光景ですが、人間は本当に悲しいとき、不安なとき、口では何とも言えないときに、詩や歌——凝縮された表現や音楽に近い言葉——で気持ちを表わしたくなるものかもしれません。本居宣長が述べたように、自分の書いたものを他の人に読んでもらうことによって、書く者も読む者も慰めが得られるのかもしれない。

「源氏物語」はいろいろな面で優れている作品だと思えますが、今回、あらためて思い出されるのは、悲哀、哀傷の場面、恋人、妻、子供を失った場面、失った人を回想する場面(「桐壺」「夕顔」「葵」「幻」「総角」など)です。「桐壺」の巻を例にとると、野分の場面で桐壺院と源氏の祖母が交わす贈答歌が、それまでのふたりの複雑な感情のすべてを凝縮したかたちで表わすことになる。このように、主人公をはじめとする登場人物たちがこころに深い衝撃を受けて、時間とともに過去を振り返る場面が非常にすぐれていると思います。王朝文学(特に和歌、日記、物語)の大きい特徴は、季節とともにめぐる周期的な時間と



ふじい・さだかず／東京大学教授



ハルオ・シラネ／  
コロンビア大学教授

個人の生の前進的な時間とがしばしば交差することです。季節の周期的な時間が個人の過ぎ去った過去を強く思い起こさせることとなり、過去と現在が同時に存在して響き合うのです。『伊勢物語』第四段の、「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもの身にして」が典型的な例です。さらに微妙な時の変化や日々の時間の流れの意識が加わって、その中で、個人(登場人物)が自分の過去と人間関係を探る。王朝文学は「時間の文学」と言っているほど、人間のさまざまな時間を徹底的に掘り下げています。テロのことに戻りますが、9・11の後、しばらく時間が止まった感じでした。日常の時の流れが止まって、過去と現在と将来とが同時に思いやられた日々でした。

テロと『源氏物語』は一見まったく関係ないように見えますが、テロの一つの根本的な原因は誤解と失望です。テロは、相互に意思を伝え合う方法や可能性への信頼が崩れるときに起こる現象です。『源氏物語』の語り原型は色好みであるとか貴種流離譚であるとかいろいろ言われていますが、紫式部にとって一番根本的な関心は、人間のお互いの誤解とその誤解から生まれて来る悲劇ではないでしょうか。『源氏物語』は世界最初の小説だとよく言われますが、私から見ると、『源氏』に「小説的」な特徴があるとしたら、それは何よりも、そこに展開される dramatic irony(ドラマティック・アイロニー)です。

ドラマティック・アイロニーというのは、ある登場人物が話したり、考えたりしているときに、読者にとっては、

### 9月25日 東京より (Eメール往復書簡②)

藤井貞和

シラネさん、『國文學』01年12月号(特集「王朝文学―韻文と散文の交通」)の、「仮定法としての『源氏物語』―コロンビア大学オープン・ゼミ」は、いくつもの意味で、読者を勇気づけます。第一に、『夢の浮橋』『源氏物語』の詩学(中央公論社、92・2、角川源義賞受賞)、『芭蕉の風景文化の記憶』(角川書店、01・5、石田波郷賞受賞)の著者である、そして編著『創造された古典』(鈴木登美との共編、新曜社、99・4)においてカノン形成の問題を提起したハルオ・シラネによって、新たな文化論の構想が積みだされます。それは、「試論なくして事柄が自然発生することはない」との見地から、西洋理論への立脚を意図して表明する、それ自体きわめて挑発的な構想でした。第二に、コロンビア大学院でのセミナーのすすめ方を、再構成して、私どもへ示してくださいました。これについてはわが小林正明の尽力のなせるところでもあり、日本社会(特に教育機関)への、みごとな架け橋となっていることでしょう。そして第三に、01年9月、ニューヨークという、時日と場所とを刻み入れたシラネ・ゼミ(秋学期)であることに、われわれは認識を新たにしないわけにゆかない(再構成ですから、9・11とのダイレクトな関係は望見できないものの)。

9月11日(01年)、ニューヨーク市の、学友たちその他、

その登場人物が相手の心理や状況などを明らかに誤解していること(あるいは自分自身を誤解していること)が見てとれるということです。ドラマティック・アイロニーは、『源氏物語』の第一部にも無論ありますが、第二部になつて深くなり、第三部では全体にわたって染み透っています。Tony(皮肉)というものは、文字通りの意味とそうではない意味の「差異」のなかに立ち現れます。Dramatic ということは、その差異が「劇的に」、立体的に見えるということです。

『源氏物語』における複数の語り手と複数の視点とが、その「差異」を「劇的に」見せてくれているわけです。特に、主人公、光源氏は自分の好きな女性のことをよく理解しないで、自分で知らないうちに相手を傷つけながら行動しています。極端な言い方をすれば、光源氏は、自分が最も愛する女性、紫の上を、(女三の宮と結婚すること)自分ではそうと気づかずに、最終的には殺してしまうわけです。もちろん、『源氏物語』は当時の貴族社会の結婚制度や位と階級の差などが引き起こすさまざまな悲劇をも語っているのですが、『源氏物語』が世界最初の小説(小説)や「Novel」という言葉とその概念自体に問題はありませんが)と見なせるとしたら、それはドラマティック・アイロニーを心理的に徹底して追求しているところではないかと思うのです。どうでしょうか。

今日はこのくらいにして、こんどは藤井さんのお話を聞かせて下さい。

身近な人々の安否の確認作業がすすめられ、病院には献血をする人々が駆けつけている、との一報を、同日中にコロンビア大学の大学院生から私は受け取りました。「テレビでは、(戦争には)いりませんでした」など宣言しているが、愚かな返しをしてUS(=合衆国)が事態をエスカレートさせないことを望む」とも、そこには付記されていました。リアルタイムでむき出しのメディアが日本へも映像を送りつづけ(戦争報道が徹底して管制下に置かれることと対照的かもしれない)、2機めの突入、ツインビルの崩壊、3機めのペンタゴン突入、4機めの墜落をつぎつぎと見せつける。その時点で11機がハイジャックされ、のこる7機のゆくえがわからなくなっている、という報道もまじって、テレビの画面のまえに立ちすくみながら、私のなかから出てくるのは声にならない悲鳴です。

その10年前には、地下を爆破したテロがあり、6名死亡という惨事で、そのときニューヨークに暮らしていた(コロンビア大学に客員教授として滞在中だった)私は、大学院生のアパートで、その夜、持たれた、慰めのパーティーにおいて(とは、かれのパートナーがそこに勤めていて、彼女は煤だらけになりながら80階から階段で降りたのです――、かれらがひそひそと「あれはビルの倒壊をねらったテロではないか」と話していたな、といまに思いだし

ます。

その意味で、ニューヨークカーたちの奥に蔵匿<sup>いざ</sup>された、既視感に満ちた悪夢の「実現」だったかもしれませぬ。10年まえのあの日は、授業を終えてそとへ出ると、世界貿易センターで「事故」があつたらしい、という知らせがはいって、院生とそのパートナーのために、みんなが心配して学科のオフィスにあつまり、彼女はビルのもとに出るやただちに電話をいれて無事を知らせる、という、文字通り大学のオフィスが、かれらの学問研究だけでなく、生活の中継地としても機能していることをまざまざと知らされました。これは特記すべきことです。

今回はマンハッタン島での生存（＝生活） 自体をおびやかされるという、一変した状況で、大学の卒業生など、関係者からも多くの犠牲者を出した大惨事であり、大地震や、憎むべき戦争に匹敵する惨害を、テロリストたちが引き起こしたことにおいて、けつして神の名ならぬ、人間の名によつて告発されなければならぬ犯罪でありました。

これもその日のうちに（上記の院生のEメールのように）、一部ではあるにせよ、報復行為に出てアメリカ合衆国のためにならないという、冷静な分析をもとめる声や、報復反対の声明が出はじめ、旬日ののちには例の、いくつもの反戦チェーンメールが、カナダの片田舎から、イス、オーストラリアなどをめぐり、ニューヨークをへて日本、韓国へも送りとどけられます。被害者たち（いうまでもなく多国籍でした）の無念を思

うと、「敵」を探しだし、報復止むなし、とするきもちと、そうであつてはならないという、高い感情とのあいだに、引き裂かれる米国民の苦悩を、各種投稿やさまざまな意見表明のなかに見ることができました。

対するのには日本では、どのような支配的「感情」が進行していったか、とても私には9・11の直後に日本社会で起きたその「感情」生活の実際を、一口で説明することができません。無論、官製の「意見」は同盟的な米傾倒で、のちのイーリス艦派遺構想などにつながるアフガン攻撃支持へと発展します。

けれども、ひろく日本社会を覆う（じつはアジア全体でもそうでしたが）、まさに湾岸戦争にひきつづくかのような、「対岸」の火事見物気分は無ざんなことでした。湾岸のときにはまだしもありえた、感情のダブルバインド状況の自覚は、今回のアフガン攻撃へといたるメディア報道の論調をはじめとして、根こそぎうしなわれたかのようであるでみんな幼児退行や言葉狩り（「テロというべきではない」、「戦争の定義は」云々）をこころみている、あわれない日本社会でありました。私も言葉遊び作品を発表して、意図してかれらの仲間入りをはたします（読売新聞に発表した「チェーン」という回文詩のことです）。

また、私は「ほんとうの物語敗北史とは」という書き物をひそかに書きだして、あとを書けなくなりました。物語とは、複数の語り手や主体が錯綜する、ダブルバインド状況なら状況を引き受け、自覚して、けつしてそこから立ち

去らないことです。私は報復戦争を無意味なこととして反対しますが、それは真に無意味であるばかりでなく、戦争そのものを否定する非戦の立場から反対するとすると、反対そのことが無意味となつて、救いがたいダブルバインド状況におちいります。

『夢の浮橋』において、ドラマティック・アイロニー（注）によつて、『源氏物語』の対読者の関係、主人公対主人公の関係の、ダブルバインド状況がみごとに解き明かされていった考察を、いま強力に、私は思い起こしています。「複数」の語り手、そして「複数」の視点という提起は、古びない視野、方法的模索の出口を提供しつづけているの

ではありませんか。『源氏物語』をとおしての思考実験がつづけられなければならない理由です。副タイトル『源氏物語』の詩学は、『源氏物語』自体のそうした創作技法の探索であるとともに、現代での文化技術をわれわれ自身がどう身につけるかという「詩学」でもありました。おっしゃるとおり『源氏物語』と現代とは深く結びついて容易に離れないのです。

（注） 会話の対称が二人称であるとともに、語り手が語りかける相手（聴き手）もまた二人称であることはドラマティック・アイロニーかもしれませぬ。

## 9月14日 ニューヨーク市から (Eメール往復書簡③)

ハルオ・シラネ

同時多発テロ後の数ヶ月の間に、アフガン戦争が起こりました。二重三重の悲劇になりました。今まで被害者になつていた私たちアメリカ人が今度は一種の加害者にもなりました。湾岸戦争のときと同じように、情報がよく入りませんでした。メディアが政府と協力していること、一方的な映像を出していたことがよく分かりました。最初の事件から二ヶ月後、アメリカの一般向けの文学研究・教育雑誌『PMLA』02・5に頼まれて以下のようなことを書きました。特集の題は「今なぜ文学を教えるか」でした。

今回のように深く大きい悲しみをもたらす惨事が起きた

とき、文学研究や文学教育はほとんど無力に見えるかも知れない。しかし、このような時こそ、文学が重要ではないかと思う。文学は、人間の根本的な、一番深いところを探求して表現する方法であるばかりではなく、自分が知らない文化や社会、そこに生きる知らない人々の気持ちや状況を想像力を通して理解するために不可欠の手段だと思ふ。

この十年間、アメリカにおける文学研究は根本的に変化した。文学研究はもはや、特定のひとつの国や国家の文学を研究したり、その国の伝統を教えるだけの分野ではない。文学研究は multiculturalism 複数文化の研究になり

つつある。今日、英文学という分野は、イギリスの文学だけでなく、インド、南アフリカ、カナダ、アメリカなど、ひろく英語圏の、あるいは英語で書かれた文学を研究する分野に拡大しつつある。スペイン文学も、スペインという国の文学だけでなく、南米や北米のスペイン語圏の文学をも研究・教育の対象とするようになってきている。フランス文学、中国文学についても、ヘブライ文学、アラブ文学についても同様のことが起こっている。ヨーロッパ中心のナショナル文学の研究から、グローバルな文学・文化を対象とする分野になってきている。

テロの時代、その反動としてのアメリカ（おもにハワイトハウス）の愛国主義と国家主義のナショナルリズムの流れのなかでこそ、このような意味でのマルチカルチュラルな文学教育は重要であり、文学研究者、教育者の責任も大きい。テロはいかなる理由によるものであれ断じて許されるものではないが、テロの根本的な原因（経済的なグローバルイズムの浸透のなかでの貧富の格差や反米感情、パレスチナの問題、植民地主義の歴史のその後など）も追究しなければならぬ。北米やヨーロッパ以外の地域——中近東、南アジア、東南アジア、南米、東アジアなど——のそれぞれの文化と歴史をもつとアメリカの一般教育（小学校から大学まで）の対象にとりあげる必要があり、アメリカ

人全体の視野を広げなくてはならない。アメリカは合衆国で、全世界のさまざまな人種と民族が作っている国だ。ニューヨーク市は複数の民族が一緒に住んでいる大都市である。自分を知るためにも、異文化を知るためにも、非西洋文化とその歴史の教育が必要である。冷戦後、世界の構造が根本的に変わり、国際的にも国内的にも、多元的な複数文化・複数の民族の時代に入った。テロは、この新しい複数文化・複数民族の時代の一つの暗い産物である。異文化（特に遠い非西洋文化）に生きる人々の状況を理解するために、また国内のさまざまな民族を知るためにも、今こそ文学が広い教育の場で強く要請されている。

ざつと以上のようなことを述べました。紫式部は、「蜚」の巻の有名な「物語論」で、物語（文学）は『日本紀』のような歴史書が見せてくれない世の中や人間の側面を教えにくれると述べています。この論を拡大すれば、文学が正史にたいする批判にもなります。例えば、善と悪の抗争というプロットを強調するアメリカ政府（ホワイトハウス）の国家主義のナラティヴが「正史」だとすれば、文学Ⅱ「物語」こそが、もつと複雑で多彩な歴史や、さまざまに異なる複数の視点を見せてくれるのです。そこから、複数の声や抑えられた声が増えて来ます。

## 9月20〜24日 トリチュール、チェンナイ、シンガポール 発

藤井貞和

（Eメール往復書簡④）

14日に成田空港を発つまぎわに往復e-mailを受けとることができました。この「往復e-mail④」では、文学教育が現代の暗部をもふくめたグローバルな状況に対し、どう立ち向かえるかを問う、「往復e-mail③」に向き合いました。

おっしゃるように、英文学なら英文学は、英国の文学だけではなく、インド、南アフリカ、カナダ、アメリカなど、英語圏の文学になっていきます。ある意味で植民地主義の変形ですけれども、英国自体ではなりたたなくなつた英語文学の、世界的な規模での再編成がすすみ、それはアジアやアラブ、イスラム圏をすら包みこみます。インドではしばしば訳かれます。「日本の詩人や作家は何語で書くのか」と。これらの認識としては、日本語をネイティヴとする日本人作家が、もしも「世界」に認知されたいならば、たとい日常的には日本語だか何だか地方語でしゃべっているとしても、発表する作品は英語で書いているだろうという、当然の誤解を前提にしたうえで、念のためにたしかめるような思いで「日本の詩人や作家は何語で書くのか」と訊いてくるのです。

私のインドはこれで3度めです。ヒンディー語、ウルドゥー語をはじめとして、今回はカンナダ語、マラヤーラム語、タミル語の使われる諸地域です。私は途中参加です

が、仲間たちはコルカタ（カルカッタ）で、ベンガリー語の女性作家マハツシエタ・デヴィ氏を訪ねる、という目的をも達成しました。

いったいそんなにまでして何をともめるのか、と呆れられそうですが、これまで日本とインドとの文学的「出会い」は、多くの場合、英国やアメリカ圏を媒介に英語をとおして接触する、という在り方だったのです。さらに言えば、もしお仕着せのプロジェクトに凭れかかるだけならば、いつまで経っても事態はかわりません。直接、出かけていって対話しようという、手作りのキャラバン（その名も日印作家キャラバン）でした。

私なら私が、日本語でマハツシエタ・デヴィの作品を読みたい場合に、ベンガリー語からの翻訳がぜひとも必要となつてきます。ガヤトリ・スピヴァグ経由（＝英語）でサバルタン（下層民）研究をこころみる研究者は日本国内に何人もいますが（スピヴァグの批評書のなかに何とデヴィ氏の作品がはいっている）、知りたいのは直接なるインド、多言語下に活きられるインド、作家そのひとそのひとの言葉、呼吸のような肉声に近い文学の言葉ではないでしょうか（九〇年代のはじめに『ジャグモーハンの死』〔大西正幸訳、めこん社、92・1〕があります）。

無論、直接に知りたいとは、カンナダ語やマラヤーラム

語で交流したい、というようなことではけっしてありません。多民族、多言語社会や、非英語圏でこそ、英語なら英語が共通語にならざるをえないという状況の確認です。複数の言語を生き生きと、そしてしなやかに文化や文学が越えてゆく、いわば言語の生存状態へのわれわれの感嘆がここにはあります。ケーララ州のトリチュールでは、古典語のはずのサンスクリット語をベースとする、二千年以上をへてきたとかれらの言う、クーリヤッタム劇をも観ることができて、われらの感嘆は頂点に達したことでした。

かれらインドの詩人たちや作家が、ウルドゥー語で書く作家はウルドゥー語で朗読してくれ、またヒンディー語でスピーチしてくれるという状況は、われわれが（無論、英語をまじえるものの、基本的には）日本語で語りかけることへの、当然の返礼であります。多言語状況下でのいわば「本音」でもあって、英語という準公用語の受け入れをモットーとしつつ、かれらの主体的な選択でもある、という態度を明るみに出したことになりました。

シラネさんのEメールのなかに、さりげないが重要な確認があります。「アメリカは合衆国で、全世界のさまざまな人種と民族が作っている国だ。ニューヨーク市は複数の民族と一緒に住んでいる大都市である。自分を知るためにも、異文化を知るためにも、非西洋文化とその歴史の教育が必要である。」

私はいま、それ自身が「世界であるようなインド社会にあって、シラネさんの言葉に出会うと、まったくそのとおじつつ、出口のまったく見えない現代日本に「悶え」て、インドにまで調査にやってくる、ヒンドゥー・ナショナリズムと格闘する（『ヒンドゥー・ナショナリズム』中央公論社、中公新書ラクレ、02・7）。出口のみえない社会が、出口をもとめだしたとき、戦前の日本社会でどんなことがあったか、諸刃のやいばのような「悶え」であるにしろ、中島のような悩める若者の在り方は貴重な、あるいは希少価値であるかもしれませぬ。

国文学は「国」の文学「国文学の学」という意味であり、ある種の「出口」ないし「入口」を演じるかもしれないナショナルな回路をつねに持ちます。日本社会での英文学だって、フランス文学だって、「国文学」にはちがいないのであって、シラネさんの洞察のとおりです。「国」に

9月28日 チェコのプラハにて (Eメール往復書簡⑤)  
ハルオ・シラネ

藤井さん、インドの多民族社会、多教言語の現象と詩人・作家との関わりをととも面白く読ませていただきました。感銘しました。今の日本における「国文学」研究が世界の他の国の文化や文学とほとんど直接交流がないこと、あるいはインパクトが少ないことはとても残念だと思います。日本語から英語その他の外国語に訳された国文学の研究書はゼロに近い現状です。欧米にいる仏文、独文、インド文学などの研究者は、自分の研究を出来るだけ多くの

りだと深くうべなざるをえない。無論、インドの今日、急速にヒンドゥー・ナショナリズムという求心力がある種のひとびとからつよくもとめられ、イン・パキ紛争の先行きが不透明な状況下（ウルワシー・ブタリーア『沈黙の向こう側』藤岡恵美子訳、明石書店、02・3）が出ました）に、国全体をまとめあげようとする動力がある程度、はたらくということがある。しかし、相対的に文学者たちをはじめとする文学的、文化的、あるいは社会的抵抗がつねにバランスをとりつづけ、また多様性の「世界」そのものを一体化する論理など現実にはありえない以上、この大きな多言語的、多民族的「民主国家」の世俗的将来像をわれわれは注視しつづけるべきではないか。

ひるがえって、日本社会はどうでしょうか。日本社会には公用語の規定がないぐらいに、日本語の圧倒的使用ですが、もしそれを第一公用語とするなら、第二公用語は当然、アイヌ語になります。また多くの沖縄諸語（琉球系日本語）がおこなわれます。朝鮮語も根をおろしています。けれども、一言語一民族国家だと思いついて「日本人」はけっしてすくなくない。たとい一言語であろうと、それはベンガリー語やタミル語が一つの言語であることとおなじ意味で一言語です。

若い中島岳志は、一九九四年に大学にはいり、その翌年には地下鉄サリン事件があり、社会学者からは生きる意味を問わない「まったく世代」だと「賞賛」され、しかし小林よしのり（民族主義的な漫画家）にはつよい違和感を感じもぐりこみながらそれに奉仕しない、といったタイプの精神活動を維持して「文学」研究をつづけることは、実際に、なかなかしんどいことであって、ややもすれば文学史の記述などで、くりかえし「正統派」国文学の復権が主張されます。「反体制」であるはずの物語文学が、その「正統派」を裏切るかのごとき位置を要求される現状は、なんと言っても「歴史」のアイロニーでしょう。最終的には「ものけ」にも生きる権利があると主張する物語ですが、しずかに物語のうちがわから立ち去って、かれら（ものけ）がもぬけのからようになった「物語文学」の屍を読まされる日が、もうすぐそこにまでしのび近寄ってきているかもしれません。

\*藤井『源氏物語論』（岩波書店、00・3）参照。

人、自分の国以外の人にも訴えかけたい気持ちがある強いの国際的に著作活動をしようとはしますが、日本ではその気配はほとんど感じられません。皮肉なこと、日本は翻訳王国です。日本ほど翻訳の盛んな国はないでしょう。他の国の流行に敏感で、翻訳が早い。ただしこれは一方通行的で、文化的な輸出は少ない。俳句、『源氏物語』、能、漱石、谷崎、川端など、海外の研究者たちは日本文学を必死に翻訳し、紹介しようとしています。これはたいへん孤

独な作業です。お金になりませんし、翻訳はほとんど業績になりません。もっと日本の国文学者に国際的な場で活躍してもらいたいですね。最近少しずつそういう方向に向かっています。海外における日本文学の翻訳と研究の促進につながりますし、国内における国文学研究にも刺激になるはずで、国内における国文学研究がますます細分化している今、大学改革などで職業的な危機に直面している今こそ、こうした活性化が必要ではないでしょうか。

私は今、日本文学の国際会議のためにプラハに来ています。プラハの旧市街真中にあるカレル大学 (Charles University) はチェコの国文学研究の中心ですが、一九八九年、Velvet Revolution ベルベット革命 (ベルリンの壁崩壊後の動き) までは悲惨な状況で、研究者は自由に国外に出られなかったし、自由に研究できませんでした。今回の会議の主催者の一人リーマン教授 (Anthony Liman) は一九六〇年代末に亡命して以来、二十年以上祖国に帰れませんでした。

プラハは大河、ヴルタヴァ川の両側に位置する、こじんまりした、すばらしい街です。中世の城下町がそのまま残っている風景です。川の西側にそびえる丘の上に大きい城・宮殿があつて、東側にはオレンジ色の屋根の古い建物が並ぶ旧市街が広がっています。街じゅう、石畳の細い路地があちこちに曲がりくねっています。幾世紀にもわたつて、新しい建物や道路が作られる時、古いものを壊して全

体を立て直すのではなく、古いものと並んで新しいものが付け加えられてきました。その結果、一つ一つの路地がそれぞれ独特の個性を持っています。いくら歩いても飽きない街です。旧市街の中心に大きい広場があり、どんな路地を歩いても、いつかまたこの広場に出て来ます。

ある意味で、プラハの旧市街は『源氏物語』の構造と魅力に似ています。中心の広場 (光源氏の一生) があり、そこにいろいろな方向からつながっている、それぞれ個性豊かな路地 (女主人公たち) が次から次へと出て行きます。『源氏物語』には「一見すると必要のない巻や場面や登場人物——たとえば、「匂兵部卿」「紅梅」の巻など——があり、この作品はいい意味で横道の多い「街」のような物語です。ひとつの角を曲がると、新しい登場人物が待っています。紫式部がそれぞれ性格の違う個性豊かな女性を次から次へ鮮やかに作り出していったことに、あらためて感嘆します。

プラハはこの夏、歴史上最悪の大洪水の被害を受けました。今、中心を流れるヴルタヴァ川の水位はもとに戻っていますが、旧市街の多くの教会、店、博物館などが大きな被害を受けました。地下鉄はいまも水で一杯になっていて、復旧にはあと一年ぐらいかかるということです。目下、主な交通機関は路面電車だけなので、電車は東京の朝夕のラッシュ時よりもさらに満員の状態です。ところで、洪水が最悪の時に、インターネットで次に掲げる俳句がチェコ語で飛び回ったということです。

JAK RYCHLYJE / PROUD RĚKY BEROUNKY  
/ PO CERUNOVYCH DESTICH  
五月雨をあつめて早しヴルタヴァ川

このチェコ語の俳句が一気に広まって、有名になったというのです。チェコ人のリーマン教授に言わせると、今まで日本の俳句の存在を知らなかった多くのチェコ人がこれで俳句を初めて知りました。これが松尾芭蕉の『奥の細

道』中の名句、「五月雨をあつめて早し最上川」の変形だとは知らなくても、街の人の感性にピンときたらいいのです。夏の長雨が広い地域 (ハンガリー、チェコ、ドイツ) にわたって、複数の川からヴルタヴァ (モルダウ) 川に流れ込んで今回の洪水になったそうですが、この俳句は、「五月雨 (夏の長雨) をあつめて早し」と、実にうまくその状況を簡潔に表現しています。これは日本文化の輸出の良い例かもしれません。

10月9日 東京より (Eメール往復書簡⑥)  
藤井貞和

五月雨をあつめて早しヴルタヴァ川

連日、報道された、ヨーロッパの歴史的な大洪水のなかで、チェコ語の俳句が一気にひろまった (しかもインターネットからはじまった) とは、小気味のよい話ではありませんか。俳句 (あるいはハイク) はたしかに、国際時代を象徴する、じつに豊穣な (増殖する) 形式だ、との一言に尽きます。『源氏日記』のタチヤナさんから昨年、聞いたのは、ロシアでもハイクが盛んで、芭蕉の人氣がベースだろう、ということでした。おなじく昨年、湘西 (湖南省) に行ったとき、中国でやはり俳句がブームで、もともと漢俳というのがあったからだろうという意見を聞きました。インドでも知られていて、ヨーロッパからはいつてひ

ろまったそうです。全米、全ヨーロッパで、詩人たち (なまえを挙げきれませんが) に、早くから inspiration を与えつつけてきたことは周知のとおりです。

シラネさんは『源氏物語』の研究につづいて、俳句の「原型」(という言い方をしています) をなす、芭蕉の詩学について、まさに正面からとらえ、その17世紀詩人の、定型性や、あるいは破壊と達成とについて、精妙に論じられました。芭蕉の風景、文化の記憶。詩であることの正当な評価をもとめる、貴重なおしごとであつて、日本社会ではいままでもあまり見られなかった視野です (川本皓嗣氏にすこしあります)。それゆえに毀誉褒貶のはばは大きかったかもしれません。私どものやっている物語叙述会では、その日本語訳が出たとき、早速とりあげて合

評をしたのですよ(発表者 木村朗子さん)。お知らせしなかつたかもしれません。

私は芭蕉や、日本文学の一角を占める俳諧という文学、すぐれた近代(や現代)俳句詩人たちの詩的活動について、詩として評価することをもっと推しすすめるべきだと思っています。しかしそのことと、盆栽や水石おなじように日本社会が広く愛好する形態であることとを、はつきりと分けたいと思います。また世界に知られるようになったハイクは、多くの言語社会によって愛好されるようになった、つまりもともと世界のどこにもあった「短詩」を再開発して、現代にふさわしく生きられるようにした、Impactのつよい、ある種の「国際詩」であつて、多くの現代詩人にそれらがインスピレーションを与えることをこそ評価すべき、それら自体は大衆文化にすぎません。あるいは言語の境い目をパスポートなしで越えてゆく平和な使節たちなのかもしれない。

日本の著名な作家が(大江健三郎氏ですが)、カリフォルニア州のどこかで講演して、ある質問に答えて、「俳句は文学じゃありませんよ」と言い返したので、会場がざわついた、とは聞いただけの話ですが、さもありなん、と思われるのです。でも、日本社会でそれを言う、もつと会場がざわざわとすることでしょう。大江さんは俳句を大衆文化と見たてて、それに対して文学の特権化した勘定になりますから、単に言い返したにすぎない、といえすぎないのですが、もうすこしほんねのようなところを付度すれば、近代文学にしろ、現代文学にしろ、本格的な小説なら小説、批評に耐えられるすぐれた作品なら作品が、きちんと翻訳され、日本文学として受け入れられる、というような、評価の基準がまるでなくて、恣意的に、翻訳者たちのさまぐれで、英語なら英語に供される、という事態へのいらだちです。俳句自体の問題あるいは責任ではない。

翻訳や著述でこそ、日本の近代や現代文学の研究者たちが、ちゃんと文化的に「国際貢献」できる、ただし冷静に、専門家としての迫力でやってほしい、世界への貢献という舞台であるはずなのに、ジャーナリズムや出版者たちへんに追従して、研究者としての批評の目を曇らせているひとがすくなくないみたい。戦争資金に90億ドル出した、紛争地域へイージス艦を派遣することだけが「貢献」じゃないですよ。文学者や研究者たちこそは文化的、平和的に、国際時代に真の貢献ができるはずなのに。

たしかに「批評的」なだけで活躍しているひともけっこう多くて、かれらがおとなしめの研究者たちから白い目で見られることには一定の理由があることになりませんが、その研究者たちはと云えば、けつしてと言つてよいぐらい、「国際的な著述活動をしよう」としません。日本の文学研究が世界の他の国々の文学や文化とほとんど直接の交流をしないこと、あるいはインパクトがすくないこと、日本語から外国語へ訳された国文学の研究書がゼロに近い現状であること。シラネさんから指摘されたそれらのことは、まさに凶星だといわざるをえないのです。

もし日本文学全集や研究シリーズを、世界のいろんな言語で出すとしたなら、現代の「ベストセラーズ」だけを持ち出すような、へんてこな翻訳状況や日本文学の紹介は、かなり是正されることでしょう。訳出されるべき作品の選定には、文学研究者の力量が問われます。ここまで考えたとき、まさに、古典文学についてですが、シラネさんたちがいま、新しいテキスト(教科書)の編纂に取り組まれていることの意義が浮かび上がってきます。

私も参加している、『ミテ』という、月刊の、雑誌があつて、今日とどいた、つまり最新号をばらばら見ていたら、「ベオグラード・レポート」のデイヴナ・イリンチッチ(日本文化をこれから専攻したいと思つている若い女

性)が、洪水のブラハまでやって来て、カレル大学のセミナーで、何と「スズキ・トミ先生がとも面白く興味深く谷崎のことについて話してくださいました」のを、聴いたので、すつて(谷崎がプラハに現れた)『ミテ』40号、02・10。ユーゴ空爆を体験したベオグラードから、けつしてへこたれない、ユーモアたっぷりのメッセージを送りつけてくれるデイヴナが、チェコまで来て、鈴木登美さん(コロンビア大学教授、シラネさんのパートナー)の発表を聴く。すぐ、日本の友人たちへ、こうして知らせてください。シラネさんのEメールとかさなつて、すつかりうれしくなつてしまつた私です。

## 9月30日 ウィーンにて (Eメール往復書簡⑦) ハルオ・シラネ

藤井さん、今回はウィーンからメールを出します。

ウィーンはまさに王朝文化の歴史的都市です。ハプスブルク家が十三世紀以来、神聖ローマ帝国の皇帝として、のちにはオーストリア帝国の皇帝として君臨し、富を集中した貴族社会が第一次世界大戦まで七世紀余にわたつて、建築、音楽、絵画、文学、その他の文化を育成、発展させました。王家の宮殿(冬の宮殿、夏の宮殿など)は信じられないほど豪華な、贅沢なものです。第一次世界大戦での敗北によつて帝政は終わり、ウィーンの宮殿は、今では国家

の文化遺産として市民(そして観光客)にも開放されています。紫式部が女房として仕えた十一世紀初期の平安朝の内裏も、規模はともかく、こんなに豪華で洗練されたものだったのでしょうか。もしそうだとしたら、同じ貴族生活といつても、越後の国の受領の日常や、宇治の大君のような隠遁生活と、内裏の生活とは甚だしい差があつたことでしょう。清少納言とちがつて、宮廷世界の表裏を描いてその世界を相対化したところこそ、紫式部の大きな達成ではないでしようか。

ところで、『源氏物語』が欧米で翻訳で読まれるとき、いちばん誤解されやすいところは、恋愛問題だという気がします。欧米の読者の多くが、初めて『源氏物語』を読んだとき、光源氏に同感できず、きわめて批判的な目で見るところがあります。源氏は女性を悪用(征服)しているのではないか、という反応をよくアメリカの学生(特に女子学生)から聞きます。『源氏物語』は、taleとかromanceと訳され、あるいはgreat love storyとして紹介されてきました。これはまったくの誤訳、誤解だとは思いませんが、『源氏物語』での「恋」と現代の「恋愛」は、根本的に違う気がします。その差を理解しないかぎり、光源氏という主人公に同感することは当然不可能でしょう。

英語のloveあるいは現代の「恋愛」というものは、他者(特に異性)と肉体的・精神的に一緒にいたいという希求、あるいは一体になつていくという感情をさしていますが、「恋」は、ご承知のように、一緒になれない、そばに居ない人を淋しく恋慕う気持ちが中心です。英語で言いますと、"to miss someone"という表現に近い。『万葉集』では「こひ」を「孤悲」という表記で書いています。「しのぶ」という動詞が「恋」の性格をよく表している。「忍ぶ」は、人には知られないように感情を抑える、秘密にするのに対して、「偲ぶ」は、人をしみじみと思ひ出すことです。主観的な印象にすぎませんが、「忍ぶ」は『古今和歌集』の「恋」の巻一・二の基本的な感情で、「偲ぶ」は、「恋」三・四・五によく出てくるように思われます。

のもっとも深く愛している女性になります。当然、源氏と紫の上の最大の「恋」の巻は、亡くなった紫の上を源氏が偲ぶ「御法」と「幻」巻です(「須磨」は「羈旅」歌、「御法」は「哀傷」歌に近い構造です)。つまり、「恋」というものは、最終的に内面的な時間と回想につながるのです。『源氏物語』が世界文学として欧米で注目される時、洗練されたロマンス、恋愛心理小説の先駆として見られることが多いのですが、ブルーストにもつながるこの物語の深い時間意識を理解するためには、誤解されやすい「恋」と時間の関係をよく説明する必要がありますのではないかと思います。

この問題にはジェンダーもかなり関係している気がします。『古今和歌集』の「恋」の巻(五巻)を見ますと、日本語の場合、特に和歌の場合、主語がないので話者が女性か男性がよく分からない場合が多い。小野小町の「思ひつ

す。いずれにしても、逢うという場面がほとんどないので。契りの前か後に堪え忍んで想い待つということが多い。

いない人を恋しく想い慕うという感情は、『古今和歌集』の恋歌だけではなく、四季、羈旅、哀傷(挽歌)、雑歌などにも繰り返し出てくるモチーフで、平安朝和歌の一つの基本的な姿勢です。七月七日の夜以外は一年中離れていなければならぬ男女の気持ち(待つことと偲ぶこと)に焦点を当てる「七夕」が、『万葉集』だけでなく、『古今集』の秋の巻の最大の季節であることは偶然ではないでしょう。こう考えると、例えば、『源氏物語』冒頭の「桐壺」巻が「恋」の物語であるとすれば、この「恋」は帝が桐壺更衣と一緒にいるところではなくて、更衣を失った所から始まることになります。「偲ぶ」ところにこそ焦点があるといえるでしょう。

「恋愛・love」という観点からだけで考えると、少なくとも西洋の読者には、光源氏の魅力がなかなか理解できません。何で女性がいやがって逃げているのに追いかけて回して悩んでいるか、ということになります。しかし、「忍ぶ・偲ぶ」あるいは「恋・longing」という見方をすると、光源氏への読者の態度が大きく変わります。同情的になるのです。例えば、源氏の須磨流離は「恋愛」の場面ではありません(周りに男しくないない)が、最大の「恋」の場面だと考えられます。光源氏が始めて紫の上を「恋しく思ふ」巻なのですから。紫の上が、ここではじめて、光源氏つ寝ればや人の見えつらむ夢としりせば覚めざらましを(52)は、「恋二」の最初の歌で、女性の視点からのものだと思いますが、「恋一・二」(逢えずの恋)は根本的に、男が女を追い求める(女が逃げる)という基本的なパターンです。それに対して、「恋」の三・四・五巻(契り)を結んで後に会えない恋)は女性中心です。そうすると、居ない人を恋しく思う「恋」というモチーフは、基本的に「男性的」な立場(女性を追い求める立場)から「女性的」(恋しく思う)立場に変わるときにこそ、彼は一段と深い主人公になるわけです。この物語でいく度も示唆されているように、光源氏は「男性的」な面と「女性的」な面、両面を持っていますが、「女性的」な面に注目しないかぎり、主人公としての、さらにはこの物語全体の重要な側面を見逃すことになるのです。

10月20日 東京より (Eメール往復書簡) 藤井貞和

物語や和歌の基底に「恋」があり、あるいは「偲ぶ」「忍ぶ」とはどういう感情であるかをしっかり理解しなければならぬ、という、シラネさんの重要な提案です。

『源氏物語』を最初に読む、欧米の読者の違和感(『伊勢物語』についてもおなじ反撥が出てくるようですが(注)、まさに「批判的な目で見ると」と言われるとおり、欧米的な

「愛」によって読むとすると、理解をはねつけてしまう、じつに不可解な光源氏の「恋愛」行動には、読者がいたくともどわされる、ということでしょう。

けれども、須磨の巻で紫上を恋慕う光源氏に焦点を当ててみると、「恋」の場面にはかならない、という視野をシラネさんはひらきます。御法の巻、幻の巻もまた、うし

なつたひとを恋いしのお箇所である、というのです。女性的な立場へと、主人公たちがシフトしてゆくと、それにあわせて読者の反応は、反撥から、深い同感へと移行します。シラネさんはこれらのことを、和歌集の部立てによっても証明することによって、物語と和歌との、深部での共通性にふれてゆこうとしているかのようです。示唆的なそれらの考察であり、何度も味わうきもちでいます。

現代日本社会が、一千年まえと、どれほど変わってしまったか、表層はいろいろに変化してきたとしても、『源氏物語』の一読者である、私の感触で言うと、精神生活の奥底は、そんなに変わらなず、現代にきてしまっている、と思えてならない。『源氏物語』の「愛情」行動のさまざまな形態を読んで、現代日本人は、ひととおりの近代社会ですから、光源氏に対して、一応、文句をつけながら、じつは違和感をおぼえたり、批判的になったり、ということがあまりないようです。

おっしゃるように、(欧米的な基準に照らして)恋愛らしい恋愛が、『源氏物語』のなかにほとんど見られない一方で、現代日本社会にあっても、「恋愛とは何か」ということを、よくわからない、説明しがたい、つきつめて考えない、という事情があつて、そういう現代社会に『源氏物語』が嵌るといふか、『源氏物語』と現代社会とが堂々巡りになって、結局、多くの『源氏物語』論が、そういう「愛情」問題を論じようとする、ほとんど人物論の気配を呈して、随筆のようになってしまいます。かえって随筆

根づきます。性役割(sex roles)という言い方が古かったかもしれませんが、そこからgender(これも性役割と訳される)が分けられます。一九八八年秋の、私の最初のニューヨーク滞在で、コロンビア大学まえの書店などを見て歩くと、女性学(women's studies)関係の本が書棚五段以上はあつて、かたっぱしからひらいて見ながら、圧倒的でした。著名なfeministたち(詩人や活動家)にもお会いできて、彼女たちから、日本のfeminist状況についていろいろ聞かれると、女性文学研究にかかわる人間(feminist)である私が、ほとんど何も答えられない、というありさまでした。日本社会でも急速にそれらの影響下にgender研究がすすみますが、おもに九〇年代の数年間です。極端に言うと、日本古典学がたどってきた女性文学研究の方向からすると、それらはまさに逆流であつて、へたをするとファッションにすぎない受け入れが日本では懸念されました。

その懸念はアメリカでのgender研究にも向けられるべきことです。比較文学のプログラムを中心とするアメリカで、もともとヨーロッパにはじまったかもしれないgender研究を肥大させてゆく理由は、文法的なgenderを持つ言語社会(ヨーロッパ圏)に対して、ほとんどそれをもたない英語文化圏での、社会的な(あるいは文芸批評や美術史的な)paraphraseだったということです。私は言語的なgenderをきちんと基礎づける必要があることを、『批評空間』で提案し「表現としての日本語」「平安物

家たちの『源氏物語』感想のほうが冴える、ということはい日常に見られるところでしょう。

Eメールを拝見しながら思うのですが、沖縄語(琉球系日本語)で、恋する女のことを男から「んぞ」と言います。九州でも「むぞう」など言うかもしれません。すきで、かわいくて、たまらない思いのする相手を、「無慚」を語源とする語で表現するのです。

無慚やな甲かよとの下のきりぎりす 芭蕉

の「無慚」です。

そういうえば、「かわいい(かわゆい)」「かつわいい、きやー!」という語も、もとは「皮映ゆし」ですか、こちらが赤らめる顔の感じですか。いとおいしい(いとしい)という語は「厭う」などという語と関係ありそうです。思うこちらがわが、つらくて、無ざんで、たまらない、もういや!という、それが愛人の意味する語になる。おなじく沖縄語の「かな」「かなしゃ」「かわいい人、愛人」は、日本古典語の「かなし」でしょう。「かなし」の語源説は「かぬ」(できかねる、未充足だ)の形容詞化だ、というのが有力ですが、まさに充足できない思いを根底にたたえて成立した語でしょう。私は『源氏物語』もそうですが、さらには『万葉集』の底辺に、この満たしえない「かなし」みを横たえて読みたい。シラネさんのいう「恋」とは、「偲ぶ」とは、この「かなし」さではないでしょうか。

七〇年代にはアメリカ社会で運動としてのfeminismが語叙述論所収、東京大学出版会、01・3)、また折口信夫の「女歌」論にみるセクシズムを批判するなどして(『国文学の誕生』三元社、00・5)、それらの懸念に対してある程度は答えてみようとなりました。

シラネさんは、小町の夢のうたのgenderに対して、従来の思いこみへの深い疑念をいだきつつ、さらには『古今和歌集』の恋一、二から、恋三、四、五(巻十一、十五)へ、という展開に対する、新たな視界を思いますがこうとしている。

『万葉集』の作歌だと、巻十一、巻十二などの作者未詳歌群であっても、男歌か、女歌かを、だいたいは言い当てることできますが、たしかにそれらをベースにしてゆくと、『古今和歌集』歌以下の、平安和歌のgenderは、えらく「混乱」をきたすこととなってきました。近藤みゆきさんらの研究が、コンピュータを駆使するなどして、ようやくこのあたりの事情に、光が当てられつつある現状です(『古今集の「ことば」の型』、国文学研究資料館編『ジェンダーの生成』臨川書店、02・3)。小町のうただから女歌だとは、たしかに単純には言いにくいのであつて、逆に言うと、中世和歌などの、男性作家の作であっても「女歌」と言うべきだ、という意見が早くからあるとおりです。シラネさんの意見はその核心をついた、というように考えてよいのではないのでしょうか。

今日(九〇年代前半のアメリカ、後半にはいつて日本で)、かえってsex(quality)からgenderを分けることの困難さが指摘されるようになりました(だからこそジェン

グー構築主義の必要性が説かれるのでしよう)。一九九二年暮れにシカゴ大学を訪れた時、「ぼくらは queer studies です」と称する数名の男子学生と私は話をする機会がありました。何か新しい事態が起きていることを感知できた気がします。突拍子もない連想かも知れませんが、私はそのとき、日本女性文学から何が世界へ「貢献」できるか、というようなもどかしい思いにとらわれました。「ポスト gender」をかれら（男子学生ばかりでなく）は、こんなに苦しんで模索しているんだ、ということに對して、日本女性文学（特に古典）から、女性性の文学の持つ、さまざまなメッセージ性を、これまでいろいろなと発信し、発言してきたならば、もうすこしは「世界」の混迷をいま救えるのに、というまったく奇妙な（＝ queer な）思いです。

父系的なエディプス・コンプレックスの枠組みで、日本社会を読みとる限り、日本の古典文学に見る（天皇や）父

## 10月27日 東京にて (Eメール往復書簡⑨)

ハルオ・シラネ

藤井さん、今東京です。いつも示唆に富んだメールを送って下さってありがとうございます。阿闍世あじよせコンプレックスへの注目は刺激的です。一見すると、『源氏物語』における源氏、藤壺、父の桐壺天皇の三角関係は、フロイトのエディプス・コンプレックス（父から母を奪って母と一緒にいたい息子の心理）を思い起こさせますが、『源氏』では、フロイトが主張する父・息子の葛藤の気配はゼロに

して「父」として出てくるように、『源氏』では双系的とでも呼びうる構造があるように思えます。

前のメールでマルティカルチュラリズムと教育について触れましたが、これは最近の私の日本古典文学研究の原動力になったものです。マルティカルチュラリズムの影響で、アメリカにおける教育制度としての文学が大きく変わりました。ヨーロッパ中心、国家中心の文学研究だけではなく、非ヨーロッパ、非西洋、少数民族との交渉を含めた分野になりました。今から振り返って見れば、ベルリンの壁が崩れたのが一九八九年です。一九九〇年代には、戦後の冷戦の米ソの二元対立から民族中心の複数文化の時代に入ったといえるでしょう。今のテロの時代もその延長です（今週起こったチェチェンとモスクワ劇場の悲惨な事件もその一つの例です）。

このようなアメリカにおける教育改革を背景に、今から五年前、日本文学におけるカノンの問題をめぐってコロンビア大学の同僚、鈴木登美と一緒に国際シンポジウムをニューヨークで開催し、その成果が日米加の研究者による共同論文集「創造された古典・カノン形成、国民国家、日本文学」に結実しました。カノン研究の前提は、今の古典（カノン）は、普遍的な価値のあるテキストだからという理由だけで古典になったのではなく、社会制度、特に、教育制度が要請して、価値を与えたテキストだということから出発するんです。フランスの社会学者ピエール・ブルデューが、生産には二つの基本的形式があることを指摘し

親は、弱々しい存在に見えることでしよう。しかしその枠組みをとばらってしまったら、相対的に弱々しいといううなことは、どこかへふっとんでしまつて、強い父親も弱い父親も消えてしまふ。それでよいのですが、やはり評価の基準が必要だ、ということなら、日本で一九三〇年代に構想された「阿闍世あじよせコンプレックス」（古澤平作「罪悪意識の二種」31年 参照、小此木啓吾「古澤版阿闍世物語の出版とその再構成過程」『現代のエスプリ』148号、79年）によつて、『源氏物語』が読まれることを、私どもは主張しました（安川洋子論文「阿闍世王説話と薫の造型」『Nitchoku』23号、92・4）。古澤がフロイトに提出したその論文は、母の力のつよい社会での子供たちの生き方を探求しており、物語研究に深い示唆を与えていると思います。

（注）以前にエイリオン・ガッテン、最近ではジョシユア・モストウさんの意見があるとおりです。

近いですよね。フロイトを念頭にしている西洋の読者は、ここで戸惑います。紫式部は父と子の葛藤は問題にせず、絶えず焦点を源氏と藤壺の関係に合せています。桐壺天皇の存在も暗にそれを補強しています。ここでは阿闍世コンプレックスのような非父系的なモデルが必要になって来ますよね。ただし、面白いことに、若い源氏が母の存在に近い藤壺と契りを結ぶ巻「若紫」で源氏が幼い紫の上に対

ています。作品の生産とテキストの価値の生産です。カノン研究は、テキストに価値を与える機関（歴史的に言いますと、寺院、学校、美術館、出版社、など）がそのテキストを再生産するプロセスを分析します。どうしてある特定のカノンができたのか、どうしてあるテキスト（あるいはテキスト群、ジャンルなど）が特権化されたのか。「創造された古典」で特に注目したのは、カノン形成と国民国家のアイデンティティー創出との深い関係です。

『源氏物語』『古今集』『伊勢物語』『古事記』など、中世、近世、特に、藤原定家や本居宣長のような学者によつてカノン化されたテキストがかなりありますが、でも、いま「日本古典文学」とされているもののほぼ半分以上、たとえば、『平家物語』、謡曲、西鶴、近松などは、近代に入つてから古典と位置づけられたものです。カノン研究は受容史研究と近いところがありますが、受容史研究は作品の解釈や受容（注釈やテキストの編成）の変遷を縦にたどるのが中心です。それに対してカノン形成の研究は、解釈や受容の変遷を権力と制度のダイナミクスの中で、要するに、制度のなかの受容の動態を分析します。

もう一つ大事なものは、カノンは必ず複数存在しているということ。時代とコンテキストによりますが、歴史的に見ると文化的な磁場がいつも複数存在していて、それぞれのカノンが作られ、この複数のカノンが競合して互いに影響を与え合っているダイナミクスがあります。場合によっては、ある文化的な磁場が権力と繋がってほかのカノンを

圧倒して主流のカノンになりますが、絶えずこれは相対的な問題です。

これからのカノン研究の方向として、少なくとも二つの大きな可能性がある気がします。これまでは主に権威と教育の問題に焦点を当ててきましたが、これからは、カウンターカノン、カウンター文化 (counter-culture) のプロセスをも加えるということです。例えば、小野小町、和泉式部などは勅撰和歌集に採り入れられてカノン化されたわけですが、一方で、説話、御伽草子、奈良絵本など、いわゆるカノン外の物語、絵、口承文学を通じていろいろな形で普及しています。歴史的にみて、ある時点ではこの大衆的な現象がカノン形成に力を加えて、カノン自体の編成・再編成に大きく影響しています。今までは、カノン研究は上から(教育機関、国家などを中心に)見る傾向がありました。これからは、下からも見る。特に、さまざまなメディア、絵巻、絵本、演劇、浮世絵などを通してこの現象を分析するたいへん面白い。近世においては、これは出版文化・貸し本屋・寄席のような制度や現象ともつながります。ある意味ではカノン研究とカルチュラル・スタディーズも連続しているわけです。

もう一つの可能性は、カノンとされたものの実態の研究です。近代になって、古典というものは、一つの作品あるいは特定のジャンルとして扱われてきましたが、実は昔から、大体の読者は作品全体を読まないと、部分だけ読む。勅撰和歌集の八代集よりも抜粋の『定家八代抄』や『百人一首』、『源氏物語』五十四帖よりもダイジェストの『源氏

いうことは偶然ではないでしょう。そのような共同の精神的な非日常の空間が必要だったのでしょう。だからと言って、そうした詩歌を権力や権威と切り離して分析することはできないでしょう。連歌師たちは古典のカノンを再編成して、新しい支配階級となる武士層に提供したし、その武士たちが王朝文化、特に『源氏物語』にあこがれてその復興に力をそそぎ、いままでも自分たちにはなかった文化的な権威を利用しながら権力を強化していったのです。このように、カノン研究は、テキスト分析と文化研究の接点になって新しい領野を拓いていく可能性がある気がします。

11月8日 原州、江陵、ソウル市より (Eメール往復書簡) 藤井貞和

往復Eメールがさいごに近づきました。創り出されるカノンとは、品田悦一氏(万葉研究者です)の言葉を借りるなら、『国民』という、いまだかつて存在したことのない団体がその「古典」の所有者とされた以上、問題の現象には、単にもともとあったものを「復興」するだけでなく、新たに創り出すという側面、少なくとも、新たな意味づけのもとに据え直すという側面が伴っていた(『万葉集の発明』(副題)「国民国家と文化装置としての古典」、新曜社、01・2)と、簡潔にまとめられたとおります。当然、品田氏は『創造された古典』をここに引いています。

興味深いことに、シラネさんは、今回の往復メールに見

小鏡『おきな源氏』といった具合ですね。文学作品が(アリストテレスが主張したような)一つの統一されたものだという意識の薄い、断片的なテキストの多い日本では、これが特に重要です。撰集が日本古典文学のひとつの大きな特徴だということも偶然ではないでしょう。要するに、日本では作品が文学の根本単位ではなく、部分の方が重視されてきたので、カノン研究にもそういう分析が是非とも必要だと思ふのです。

これと関連した問題ですが、文学的トポス (topos)、つまり、広く認められた共同のテーマのパラダイムが日本の文学カノンの柱となっているという問題があります。日本古典文学のカノンは、『源氏物語』『伊勢物語』『古今集』などの作品だけではなく、そこに内在しているトポス——春雨、ほととぎす、恋、離別、旅、など——を中心としている、という気がします。このようなトポスは特に詩歌(和歌、連歌、俳諧、歌謡)を中心にして、時代と社会的なコンテキストによって変わってきています。断片的なテキストの多い日本では、こうしたトポスこそがカノンだということがある。このトポスとしてのカノンがどのように形成され、変質してきたか、それがどのような社会的政治的なコンテキストのなかで出来上がったか、ということが今の私の研究のひとつの大きな関心事です。

文学というものはいろいろなはたらきや作用があります。現実と離れた想像の時空間を作ってそのなかに読者を存在させることもあります。そのような想像の時空間を極度に発展させた連歌がとくに室町、戦国時代に流行したことがでしうか。

今回、藤井さんと往復メールが出来て、本当に嬉しかったです。世界が縮まった感じがします。この往復メールはじまってからバリで大規模のテロが起こり、また、モスクワでもかなりの犠牲者がました。日本ではあまり報道されませんが、ニューヨークからの連絡によると、現在、コロンビア大学や他の大学の多くの学生や教員たちがホワイトハウスのイラク攻撃の計画に反対して、デモに参加しているようです。戦争とテロがこれ以上起こらないことを強く祈念します。お元気で。

ると、けっして『創造された古典』の段階にとどまることなく、かえってそれを出発点として、カノン外のカウンター(「反対」としての、物語、絵、口承文学を視野にいれ、また八代集や『源氏物語』が部分化される現象にもカノン分析の手を伸ばし、部立てや句題、季語や連歌の在りようをおしてコンテキスト化する、いわば古典の社会性にも注目するという、ある意味でカノン批判への批判にこたえようとする、研究のダイナミズムを提出したように見えます。カノン、カウンターカノンといわれるゆえんでしょう。その『創造された古典』の韓国版が、写真をいれるなどして、新たな装いで世に送りだされようとしていますね。

シラネさんが文学研究はマルチカルチュラリズムになりつつあると言われたとおり、テクストの「独占」はもはやどのような意味でもゆるされないときに来ています。逆に言うと、あらゆる研究者のパテント（先有権）をきちんと守って、世界を無視した日本研究を日本人研究者が独善的にやらないようにするための、創意、教育、そしてシステムの創出が緊急の要請としてあります。

三点に提案をまとめると、最初に、日本文学（研究）を、廃止という実情から遠ざかるけれども（写本研究の道の高さなければなりませんから）、比較研究ないし文学研究、言語研究、あるいは創作批評そのものへとシフトさせる必要がある。しかしそのシフトは従来の国文学や研究、批評の枠内で十分に可能な意識的変革です。多く若手の研究者や大学院生たちはこれまでも国文学科などに所属しながら、旧来の枠どりに飽きたらずして、はみだしてやってきました。ただし、そのような「はみだし」を学科から認められることはだいたい条件でしょう。カノン研究は温存されたディシプリン（学科組織）にあつて意識革命として支障なく行われうることです。

しかし第二に、歴史を古代史（考古学をふくむ）から変えてゆかないことには、どうしてもくびかせとなる。かりに年代に分けるとして、たとえば九九九年をもって時間の区切りとして、一千年以前は日本史、朝鮮半島の歴史、古代や中世中国の歴史などの個別を全廃し、世界の歴史学者が相互に議論できる完全な古代史そのものにすべきでしょう。一千年以上の過去を現代「国民国家」の枠から幻想す

けつしてカノン研究の先駆けということではないのですが、古典文学を歴史と人間との中間地帯に置いて、もし歴史が人間的な問いかけをうしなつたら、あるいは逆でもよいのですが、人間が歴史的に経験することの蓄積をやめたら、そのまま古典は息の根を止められるほかないと説いたのは、六〇年代のすえの日本「国文学者」の西郷信綱氏だつたように思います（言い方はせんせんちがうけれど）。氏の「学問のあり方についての反省」『展望』69・2、『古典の影』未来社、79・8）は古典の自明性に対して大きなゆさぶりをかけようとする試みでした。

今日、歴史にしる、人間にしる、まさに「古典」的な意味では問いかげなどどこかへ行つてしまつたように思えます。冷戦が東欧社会その他で崩壊したことや、民族主義という名の紛争状態の連続は、歴史そして人間的な問いを断念させ思考停止させるに足るだけの規模をほこつた、ということでしょうか。

東アジア（という語もほんとうは選択し返す必要があるのですが——）で、つづけられてきた「冷戦」は、いよいよ終末期へ移行して、拉致問題（五名の生存、帰国と、八名の死亡という北朝鮮からの報知）の急速な展開は真に衝撃的でした。二十世紀という前世紀において、いったいわれわれが何を考え、アジアで何をしようとしてきたかの「真価」がいま、問われようとしています。それなのに、身の置き所もないような拉致被害者たちに対して、まっさきに深くわびなければならぬのはだれとだれとか、ことの本質をきちんと述べているのは、ごく一部の批評家や在

る古代をいつさい棄てて、アジア学で歴史を統一させるのがよい。

現代ナショナリズムへ古代の歴史が参画してくることをやめれば、いわゆる教科書問題は雲散消滅することでしょう。言語や文化だけが地域性や諸言語の共存状態を古代において生き生きと彩色します。

九九九年を境い目とするならば、たとえば『源氏物語』なら『源氏物語』を、いよいよ日本文学から追放して、アジアの文学へと登録させなければならぬときに来ています。韓国では、留学生のそれらをふくめ、『源氏物語』だけでたぶん数本の博士論文がこれまでに書かれ、中国や台湾などでも博論や学術論文がつきつぎに生みだされ、アジアのみならず、アメリカ合衆国をはじめとして、欧米諸国で無慮数百の著書や論文が書かれてきました。ロシア、東欧社会、エジプト、トルコ、インドやタイなどの南アジア、豪州、南米でも研究がすすみます。

よつて第三に、世界から生まれる論文の共同管理が行われる必要がある。九九九年以前にあつては無論のこと、それより若い時代であつても、日本語文学にかかわる参考文献群が、一つ一つパテントを主張していると見るべきです。日本国内で書かれる論文が、情報不足から現在、世界で書かれる論文を参照しえないということは、今後、不勉強ということになります。カノンは「国文学」（＝「国」の文学、国文の学）においてのみ起きる固有の現象でした。言うまでもないことですが、韓国なら韓国の「國文學科」は自国の文学として韓国文学を研究する学科です。

日の詩人たちなどでしかないようです。日本社会の多くの世情はまったく血も涙もないにひとしい、その場限りの非「人間」的な「独善」であり、また朝鮮半島の「歴史」やひいては朝鮮文化、朝鮮語への無知蒙昧がずいぶん目立つ感じですが。このことはけつしてトップ記事にはならないかたちで、韓国国民感情としても痛みいるような思いを分かちあうことであるとうかがいます。

日韓文学シンポジウムを、最初は作家中上健次の遺志を受け継いだようなかたちでしたが、手作りでやってきて、私は四回めの参加です。出会うこと、言葉をさぐりあうこと、文化の相違をこえることが精一杯だったのが、ほぼ共同主催と言える状態にまで今回は漕ぎつけられたと思つています（ワールドカップに似ているかもしれない）。とともに、一年が十年のようにして突き進む韓国の文学と、十年間停滞を続ける日本社会との「出会い」でもあつたという感懐です。たくさんの留学生たち、元留学生たちには助けられました。

先ヶ月にも、おなじようにして南アジアとの国際交流を経験してみても、多元的なアジア・マルチカルチュラリズムの一端にほんのすこし現実性が出てきたように思えるところですよ。平壤での正常化交渉時における、拉致被害者の報道（9月17日）はインドのバンガロールで受けたのです。アジアで唯一植民地主義を実行したのがかつての日本政府であつたことをふまえ直して、一から考え直すめるとどうなるか、思案が尽きません。

充実したEメール交換でした！

（了）

日本語・日本文学・日本文化

# 國文學

解訳と教材の研究

昭和34年11月25日 第3種郵便物認可 平成15年1月10日発行(毎月1回10日発行)第48巻第1号1月号

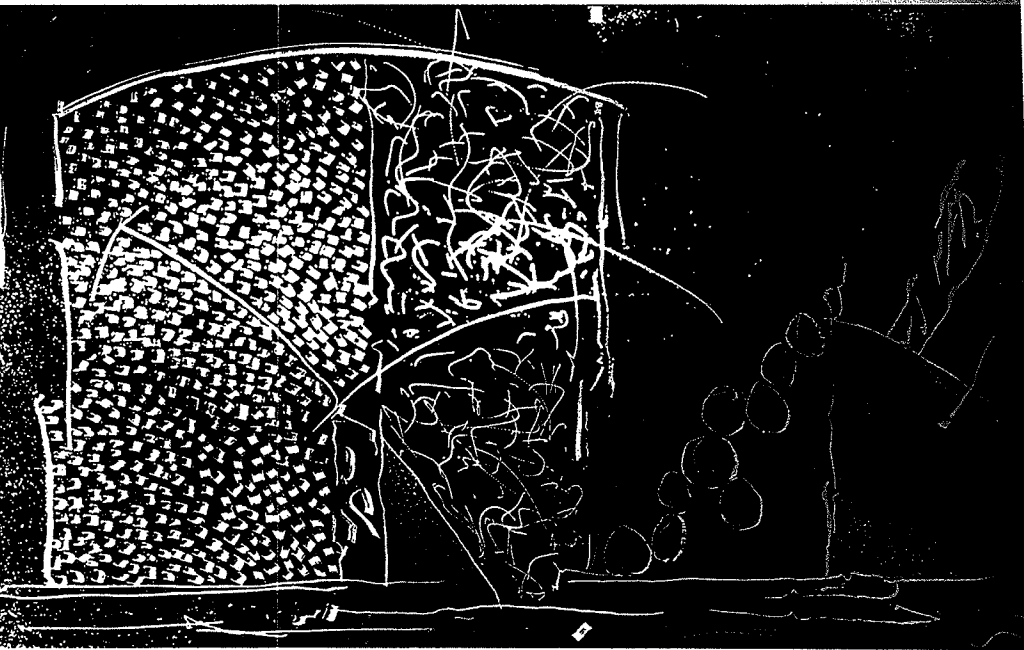
## カノンとしての王朝文学 ——イメージ・うた・物語

(Eメール往復書簡) カノン、カウンターカノン

…ハルオ・シラネ／藤井貞和

うたと物語…片桐洋一

『源氏物語』宿木巻の自然と人間—国宝絵巻のデジタル・アーカイブから／心火・祈り・呪法のイメージ—古代説話の日韓比較／『孝経』を通して見た是善と道真／音を書く・声を書く  
須磨の〈月〉と菅原道真／来迎を象る—『狭衣物語』における天稚御子を想うかたち  
『源氏物語』の絵をめぐる解釈と言説—御法、宿木、そして柏木／藤原定家の恋と王朝物語  
直衣参内—源氏物語 少女巻の夕霧／古代前期の仏典注釈—智光『般若心経述義』を中心に  
国文学とナショナリズム／何故、『源氏物語』は五十四帖なのか？



・廃墟に外接する源氏物語—9・11 外伝

2003年 **1**月号 第48巻1号

學燈社